

精神分析

戦前編

戦後編

全12巻十別冊1

A5判/上製/総六、六六二ページ

揃定価—本体二四〇、〇〇〇円十税

主宰—大槻憲二

解説—サトウタツヤ・曾根博義

愛情と憎悪 精神分析

★第7巻・第7號★昭和14年・7月★



—一九三八年四月十四日發行・表裏（高村光太郎氏原作）

東京精神分析學研究所出版部

精神分析

（誌開機所究研學析分神精京東）

月五年八和明

號刊創

我が國の文明と精神分析（創刊号）……大槻憲二（C）
 エラシム・フロイトの生涯（第1号）……長谷川誠也（C）
 エラシム・フロイトの生涯（第2号）……江戸川乱歩（C）
 フロイトの生涯（第3号）……山内長太郎（C）
 フロイトの生涯（第4号）……山内長太郎（C）
 文藝批評と精神分析（第5号）……小島良彬（C）
 精神分析と文学（第6号）……小島良彬（C）
 衣原の有る限り（第7号）……山内長太郎（C）
 今もある手紙（第8号）……山内長太郎（C）
 精神分析より見たる心の世界（第9号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第10号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第11号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第12号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第13号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第14号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第15号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第16号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第17号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第18号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第19号）……山内長太郎（C）
 精神分析の発展（第20号）……山内長太郎（C）

東京 不二出版社

フロイトを日本で初めて本格的に紹介した

在野の精神分析学者・大槻憲二主宰の

東京精神分析学研究所機関誌を復刻。

一九三〇年代から四〇年代初めまでの

日本社会の世相も鋭く分析した。

江戸川乱歩・長谷川誠也・高橋鉄などをはじめ、

多くの作家・文学者・性科学者・民俗学者・アナキストなどが寄稿。

近代日本における精神医学、心理学、文学研究に大きな示唆を与える貴重資料！

日本の精神医学・臨床心理学の源流を辿る！



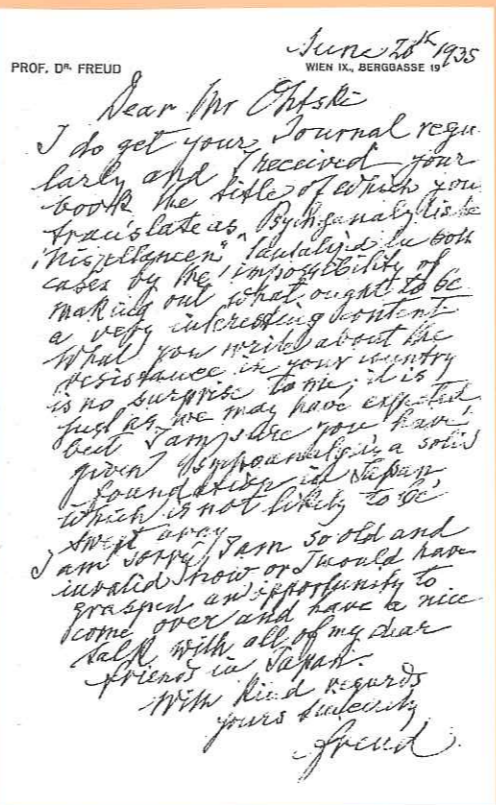
不二出版

本誌は、大槻憲二が主宰する東京精神分析学研究所の機関誌である。大槻は、フロイトを最も早く、本格的に日本に紹介した精神分析学者であり、一九二八年、「人間の深部（無意識）心理を研究し、その結果を応用することに依り個人（神経症患者）の治療及び国家社会民衆の心理的健康化を期す」目的で東京精神分析学研究所を設立した。

本誌はフロイトの精神分析を中核に「無意識心理」の研究と論評を目的に創刊された。大槻をはじめ江戸川乱歩や坪田譲治などの作家、英文学者・岩倉具栄、性科学者・高橋鉄、文芸評論家で英文学者の長谷川天溪（誠也）、劇作家・演出家の松居松翁、民俗学者・中山太郎などのほかアナキスト・延島英一や奥村博史も参加し寄稿している。

本誌では、夢の研究、戦争心理、心理療法、同性愛、恋愛心理、ドストエフ

第三巻第五号（一九三五年九月）口絵「フロイト博士最近著書論」大槻憲二宛「……貴國に於ける抵抗の事をお書きになっておられますが、それはさぞと思はれます。正に我々の豫期した通りであります。併し貴君は日本に於いて精神分析のために確平たる基礎を與へられたと信じます。さつしてその基礎は容易に掃蕩さるべくもありません。……」



精神分析

第一巻第二号
昭和九年一月

心理療法研究號

（目録）
I. 心理療法研究の概観
II. 心理療法の歴史
III. 心理療法の理論
IV. 心理療法の技術
V. 心理療法の臨床
VI. 心理療法の将来

一九三五年一〇月五日、東京精神分析学研究所が主催した「名映画分析鑑賞と講演の会」ポスター第二巻第八号掲載



刊行の辞

スキー、児童心理、優生学、精神病への理解などの特集を組み、当時の世相を表すさまざまな事件を分析しており、さながら「精神分析」という道具を使った日本社会解剖がなされている観がある。フロイト、ユング、D・H・ロレンスなどの翻訳も積極的に掲載した。また読者からの「相談」欄も興味深い。創刊は一九三三（昭和八）年五月で、時局の影響によって一九四二年に休刊された七二冊と『東京精神分析学研究所報』の「廃刊の辞」を収録する。

大槻は戦後、東京精神分析研究所を復興し、精神分析に関する著書も多く著しているが、アカデミズム優先の学問領域において排斥され、今日ではほとんど忘れられた存在となっている。

日本に精神分析という概念を定着させた大槻の主宰した本誌を復刻し、日本精神分析学及び精神医学、臨床心理学の源流を辿る一助とするものである。

我が國の文明と精神分析

——本誌創刊の辭に代へて——

大槻 憲 二

我等こゝに東京精神分析学研究所の機関雑誌として本誌を創刊するに當り、わが國に於ける斯學の過現未に就いて一言を費しておきたいと思ふ。

斯學がわが國に始めて輸入されたのは、大正改「我が國に於ける研究史」を論じてをいたが、私陽「氏稿『やり損ひの話』と云ふのが、最初の紹介から、わが國への精神分析の紹介に就いては醫られたものと云はねばならない。その後遙かに降氏（大正八年）、教育學者前野喜代治氏（大正十四年）傳説學者として斯學の貢獻に最も早く着眼したる神、丸井の兩博士は醫家としては最も先覺者である。

我が國の文明と精神分析

もう一度あの花を見に来やうと考へたのだつたが、その次に私が××堂の前を通つた時にはそれ以來一週間以上も経つたのであらうか、もう白い美しい細い花は、ところどころ茶色を帯び、しほれ、數も少なくなつて、見る影もなくなくなつてゐた。



幼きマリアと鷗外博士
(藤氏雄久問本・華氏徳百藤平)

私のこまかさへのこの慾望。植物の花や葉にまで或感動を覺えるほどの、その慾望は遂には花や葉や雨を離れ成長し、人間に向つて注がれるやうになつて行く必然性をもつてゐた。この私の提灯の花への慾望は、一先づ最初に父に向つて轉化した。意識してゐたのではなかつたが、それは表面の意識に上らなかつたといふだけの事だつたのだらう。父の膝に抱かれてゐる時、

私は葉卷の煙の中に包まれながら無意識の内に提灯の花の細さを思ひ浮べ、感じてゐたのだ。父の膝をおぼえてから、私の提灯の花の下に佇む事はだんだんなくなつて行つたのだ。私の三つの時に始まる父と暮した十四年

間の年月といふものはちやうど、私にとつてはあの白い、提灯の花の雨の中で生きてゐたのと同じ事だつたのだ。父と私の生活は十四年で終つてしまつたのではなかつた。十四年の同じ家に生活してゐた期間がす

ぎると、それから十年に亘る、父に對する私の懷疑の生活が始まつた。さうして三四年前になつて父の性格と私に對する心持との關係が私の頭の中で明らかになり、晴れたつた光の中に隅々までもそれが見えるやうになつ

創刊号（一九三三年五月）

森茉莉「細い葉卷への慾望」(第一巻第五号) 児童心理研究号・一九三三年九月より

葛藤を突きつける 大槻憲二の特異性

北山修（きたやま おさむ・精神分析医）

フロイト思想の力は、臨床心理学や技法論の科学でありながら同時に文化論でもあるという、二面性に二股をかけるところにある。もとより、フロイト自身が、科学者でありながら文化人であり、いわゆる文系、理系の両方に通じる人だったからそうあらねばならぬ理由がある。具体的には、無意識を証明して市民権を獲得するために、人々に開かれた文化的素材を分析し、人々に公開するからだ。また、患者さんのプライベート・保護のため、臨床素材をそのまま用いるのが難しく、むしろ文化論の方が自由に、そして正直に、精神分析を行うことができる。しかしながら後継者たちには、この両面性を二分法で分解し、

臨床技法論と文化論は相容れないものとする向きもある。その中で、文学者として精神分析に取り組み、我が国で精神分析雑誌を三五年間も刊行した大槻憲二だけは例外だった。あれは素人の雑誌だと言いつつ、科学者たちが情報を得るために隠れ読んだという話も聞く。大槻の仕事は海外で最近再評価され、「素人分析家」ながら臨床活動も行ったという記録もあるそうだ。精神分析が科学的、臨床的であろうとすればするほど、大槻の仕事が評価されるのは当然のことであろう。だから私たちはこの雑誌の復刻は、精神分析が抱える無意識的葛藤や欲望を顕在化させるものとして、画期的な出来事だと思おうのである。

精神分析学からみた時評の現代性

松原洋子（まつばら ようこ・立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）

「本来医者は、病気になるた人を病気でなくしてやつたり、病気になるさうな人を病気にならないやうにしてやるのが任務であつて、病気になる人間を作らせないと云ふのは、一種の死刑の執行吏の仕事である」（『精神分析』第七卷第九号巻頭言、一九三九年）。国民優生法制定の議論が高まるなか、断種法を支持する精神科医たちを大槻憲二は「このように揶揄した。その批判のスタイルは、精神分析学という生物学的精神医学とは異なるパラダイムに依拠しながら、絶妙なバランス感覚によって核心をつくものであった。『精神分析』には、主宰者大槻の精神分析学の普及に対する

旺盛な意欲と、在野の研究者としての矜持が漲っている。なおかつ、専門知から人間を見下ろすのではなく、煩悶する人間の隣人として理論と臨床をつなごうとするまなざしがある。多岐の話題に及ぶ論説や時評には、鋭敏かつ軽妙な批評性と物事の状況依存性をわきまえる現代的なセンスが光り、古さを感じさせない。『精神分析』のページを繰ることは、当時の「現実」の複数を発見すると同時に、精神分析の洗礼を受けたわれわれの視線の妥当性を歴史のフィルターを通して再検討する体験でもある。身体をめぐる思想史の研究において、複眼的な洞察を与えてくれるユニークかつ貴重な資料である。



世界のなかの『精神分析』

一柳廣孝（いちやなぎ ひろたか・横浜国立大学教育人間科学部教授）

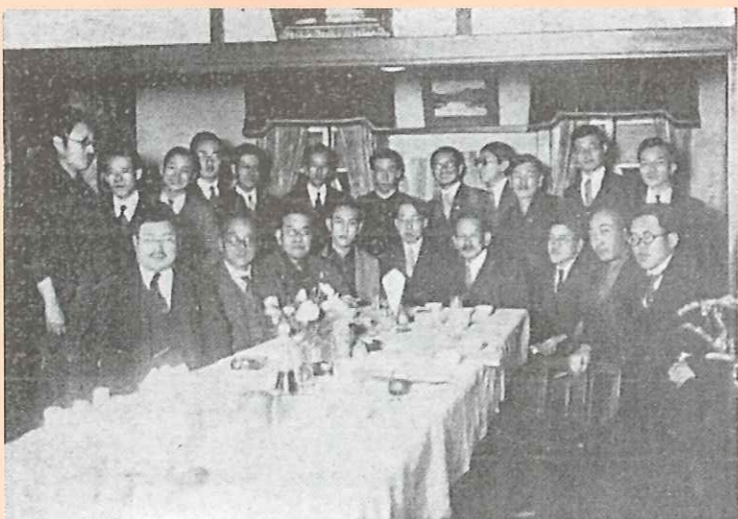
精神分析について「いわゆる変態心理・特殊心理に属する精神現象を心理的に研究・説明する新しい科学」「教育上にも、法律上にも、医学上にも、頗る重要な地位を占むるもの」などと解説しているのは、大正時代に刊行された新語・流行語辞典である。明治末年から心理学アカデミズムを中心とする動向が紹介されはじめたフロイト精神分析の潮流は、やがて大きなうねりとなり、毀譽褒貶、さまざまな言説の形をとりながら広く流布していった。それは「心」や「意識」をめぐるパラダイム・チェンジの動きであり、現実認識・人間認識のありようを根本的に変える、世界史的な事件の一部として位置づけられる。大正期

の日本では、雑誌『心理研究』『変態心理』などが、一般社会へ精神分析を伝える貴重な媒体として機能した。こうした流れの最終ランナーたるメディアが、雑誌『精神分析』である。人間や社会や世界の認識を組み替える精神分析の眼差しは、必然的に多様な領域へのアクセスを要請する。そのもつとも同時代的な反映の諸相が、雑誌『精神分析』のなかにある。心理学・精神医学のみならず、さまざまな学問領域を横断して展開された精神分析的アプローチから、私たちは世界レベルで展開していた、新たな「知」のダイナミックな動きを見いだすことができるだろう。

心理学と大衆

藤井淑禎（ふじい ひでただ・立教大学文学部教授）

「フロイトの精神分析学が一般世評にのぼりはじめたのは大正の末期、私がまだ大阪にいたころであった」と、精神分析研究会のメンバーでもあった江戸川乱歩は『探偵小説四十年』のなかで述べているが、この見方をすんなり受け入れていいかどうかは、ボクには判断がつかない。ヒステリーや夢の研究はすでに明治期後半には紹介され出しているし、性欲学説的介绍も、大正元年刊の沢田順次郎著『性慾論講話』にこそ見られないようだけれども、大正八年刊の榎保三郎著『性慾研究と精神分析学』になると、すでに当然のことのようにフロイトの講演内容が紹介されるなど、受容が相当に広がっていたことがうかがえるからである。



精神分析研究会例会 前列右より大槻憲二・江戸川乱歩（1933年頃）

そもそも心理学や精神分析学が、専門家のみならず、広く大衆の関心をも集めたのはなぜなのか。以前、明治四二年の心理学通俗講話会の驚くべき盛況ぶりを紹介して以来のボクの素朴な疑問なのである。煩悶とか性欲とかがテーマであるがゆえに世俗的関心を集めたのか。あるいは、そもそもわれわれとは違う精神世界に当時の人々は生きていたからなのか。ボクの子想は、心理学はその後専門化し（大衆とは疎遠になる）、しかもその背後には人々と精神世界との関係の変容がある、というのだが、そんなことも今度復刻される戦前版の『精神分析』をつぶさに見ていくことで確かめられるかもしれない、と期待している。



フロイト賞牌表裏



大槻憲二

（おおつき・けんじ 一八九二—一九七七）
 心理学者・文芸評論家

一八九二年、兵庫県洲本市に生まれる。父は弁護士、叔母は神戸初の女性開業医だった。神戸第二中学校を経て東京美術学校（現・東京芸大）に進む。入学する前後に夭折の画家・田中恭吉や恩地孝四郎と知り合う。

一九二八年、早稲田大学文学部英文科を卒業。ウィリアム・モリスの芸術的社會主義に傾倒、鉄道省運輸局に勤務するかたわら文芸評論活動をおこなう。一九三二年、鉄道省を退職して著述に専念。

同年岐美と結婚。このころ大田卯、吉江喬松らの農民文芸会に参加する。一九二八年、東京精神分析学研究所を設立。その頃イタリアの哲学者クロネチエの大著『美学及び美学史』の英語版ドイツ語版からの翻訳を完成。一九三三年、『フロイド精神分析学全集』全〇巻（春陽堂刊）の翻訳をほぼ独力



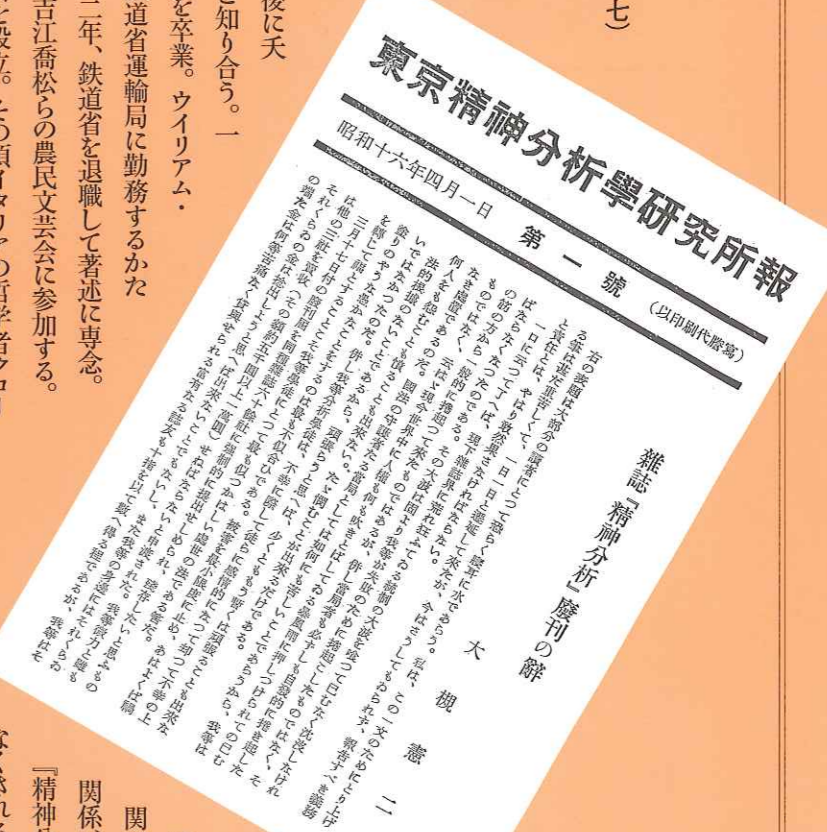
本研究所事業案内並びに業績報告

本研究所は昭和三年の創立に際し、創立者は長谷川誠也、謝藤虎治、坂田秀雄、大槻憲二、矢部八重吉、松居修、藤野野矢、酒井山夫（つらとら）その他の人々であり、その後、人員は漸次増加し、現在では五十名に達した。大槻憲二は、組織は分析部、教育部、出版部、研究部、講習部の五部より成る。現任所員及び各部長の如し、

現在所員（一部）

長谷川誠也	藤野野矢	松居修	大槻憲二
謝藤虎治	坂田秀雄	酒井山夫	矢部八重吉
大槻憲二	藤野野矢	松居修	大槻憲二

（以下、各部門の所員リスト略す）



しているが、フロイトは日本での精神分析学の発展を期待しており、文通はフロイトが亡くなるまで続いた。

戦後はアメリカの研究者とも交流、栃木県西那須の自宅と東京都大田区雪谷の研究所とで活動を続ける。大槻はフロイトを日本に最初に紹介したことで知られているが、病める者の立場にたつた人道的な「精神分析」を主張した、当時まぬ分析学者だった。

現在、在野の精神分析学研究所の第一人者として改めて注目を浴びている。フロイトから大槻に送られた書簡ははじめ多くの資料は早稲田大学に保管されている。

（協力）大槻憲二孫・長井那智子氏

精神分析

分析治療を受けむとする人々へ

近頃、分析治療を受けたと云ふ者が漸次に増え、分析家は益々多忙である。それ故に、受分析の方々に限定的に御座るべきである。この一冊は、分析治療を受ける方のために、分析治療の概論、分析治療の歴史、分析治療の方法、分析治療の倫理、分析治療の将来などについて、簡明に解説したものである。これらは、分析治療を受ける方のために、分析治療の概論、分析治療の歴史、分析治療の方法、分析治療の倫理、分析治療の将来などについて、簡明に解説したものである。

フロイド賞論文証衡決定

第一回のフロイド賞は、昭和十一年、度本誌所載論文より、長岡文治氏「母性感情の中に潜む憎悪」に授けられた。賞金及び賞状を贈ることになった。

東京精神分析学研究所・フロイド賞証衡委員会

大長 岩 倉 具 二
 槻 谷 川 誠 也

変態心理 全34巻・別冊1

●A5判／上製／総二、〇〇〇ページ
 ●揃定価 本体三、〇〇〇円十税
 編集委員 小田晋 栗原 彬 佐藤達哉 曾根博義 中村民男
 解説 曾根博義

推薦 大原健士郎／小峯和茂／関井光男／南博／山下武

中村古峯が一九二七年に創刊した本誌は、現在でいうところの多重人格、トラウマ、精神病質、神経衰弱、心霊現象、催眠現象、マインド・コントロール、サイコセラピーから、買売春、異見殺し、ドメスティック・バイオレンス等さまざまな異常心理・超心理の具体的な事例を満載した研究雑誌である。

社会心理学・精神医学はもとより、犯罪・風俗・性・差別・教育・宗教・文学などの分野に広く活用できる資料の宝庫である。

既刊図書のご案内

変態心理 全6巻・別冊1

●A5判／上製／総二、一六六ページ
 ●揃定価 本体九、〇〇〇円十税
 解説 齋藤光

推薦 佐藤達哉／山下武

田中香津が「変態心理」主幹・中村古峯の全面的協力によって発行した研究の純学術雑誌。

性研究こそが人間と社会問題にとって緊要だという信念のもと、当時「変態」すなわち「異常」と呼ばれた性のあらゆる形態を究明。生殖器の機能・疾患・同性愛・トランスセックス・買売春・遊奸・人工妊娠中絶・生殖器信仰・性犯罪などを論じている。性科学研究はもとより教育・医学・女性・文化史研究の貴重文献。

昭和六年八月十四日、五日の夕、
 昭和七年一月十一日、十日の夕、
 昭和七年五月五日、十日の夕、
 昭和七年九月五日、十日の夕、
 昭和七年十二月五日、十日の夕、
 昭和八年一月十五日、二十日の夕、
 昭和八年四月十五日、二十日の夕、
 昭和八年七月十五日、二十日の夕、
 昭和八年十月十五日、二十日の夕、
 昭和八年十二月十五日、二十日の夕、

昭和五年八月、天出版社、
 昭和五年九月、春陽堂出版、
 昭和六年二月、天出版社、
 昭和六年三月、天出版社、
 昭和六年四月、天出版社、
 昭和六年五月、天出版社、
 昭和六年六月、天出版社、
 昭和六年七月、天出版社、
 昭和六年八月、天出版社、
 昭和六年九月、天出版社、
 昭和六年十月、天出版社、
 昭和六年十一月、天出版社、
 昭和六年十二月、天出版社、

精神分析

戦前編

要書館

全12巻十別冊1

●主宰——大槻憲一

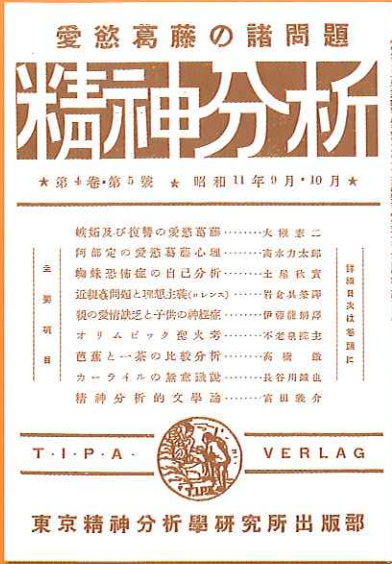
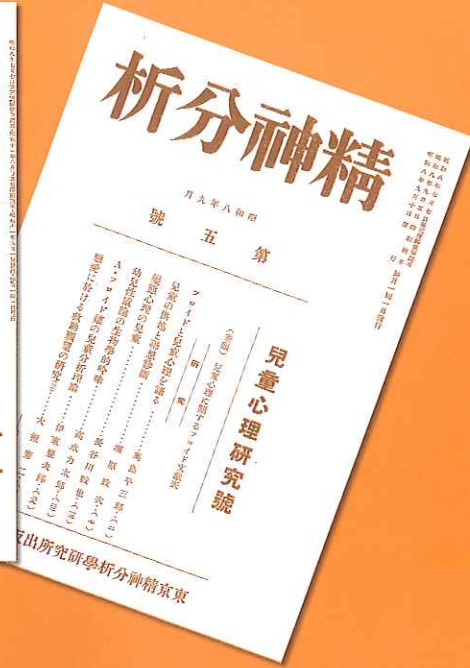
A5判／上製／総六、六六二ページ

●揃定価——本体二、四〇〇、〇〇〇円＋税

(別冊のみ分売可)——本体一、〇〇〇円＋税 ISBN978-4-8350-5973-0)

●解説——サトウタツヤ(立命館大学文学部教授)・曾根博義(日本大学文理学部教授)

●推薦——北山修(精神分析医)・藤井淑禎(立教大学文学部教授)・二柳廣孝(横浜国立大学教育人間科学部教授)・松原洋子(立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)



●配本概要

第3回配本		第2回配本		第1回配本	
第12巻 第八卷第九号、第二号、第九卷第二号、第三号 + 廃刊の辞 一九四〇年九月、四二年四月	第11巻 第八卷第一号、第八号 一九四〇年一、八月	第10巻 第七卷第一号、第二号 一九三九年	第9巻 第六卷第六号、第二号 一九三八年七、二月	第8巻 第六卷第一号、第五号 一九三八年一、六月	第7巻 第五卷第一号、第六号 一九三七年
二〇〇九年一月刊行 本体八万円＋税 ISBN978-4-8350-5979-2		二〇〇八年一〇月刊行 本体八万円＋税 ISBN978-4-8350-5974-7		二〇〇八年六月刊行 本体八万円＋税 ISBN978-4-8350-5966-6	



●表示価格はすべて税別。

不出版

〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシムル03-3812-4464
振替0016002940884